

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
個人研究
2012 年度研究成果報告書

	所属・職名	氏名
研究代表者	文学部・教授	千石 英世
研究課題	大正期新興芸術運動から戦後現代美術・現代アートへの連続性を跡付ける	
研究期間	2012 年度	
研究経費	310、349 千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

大正期新興芸術運動は、ドイツ留学からの新帰朝者である山田耕筰、村山知義ほかのヨーロッパ新興芸術運動の紹介から始まった。イタリア未来派、ドイツ表現主義、ベルリン・ダダ、パリ・シュルレアリスムである。このルートのほかに、ロシア・アヴァンギャルドが、亡命ロシア人芸術家ブリュルクの来日を契機として当時の日本に紹介された。本研究は、上記のうち村山知義、並びに、ブリュルクの活動と影響をたどることで、標記の研究課題に迫ろうとするものとなった。具体的にはこの二人からの影響下に、大正末より昭和10年代あたりから抽象美術作品を発表し、戦後、現代アートの分野で世界的評価を得るようになった斎藤義重とその周辺の芸術家たちの足跡をたどることとなった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[抽象芸術] [斎藤義重] [池袋モンパルナス]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 戦前期抽象芸術の出発は、1) 古賀春江らのシュルレアリスム傾向の絵画、2) 東郷青二らのキュビズム系の絵画が知られていたが、本研究期間中に神奈川近代美術館葉山にて開催され村山知義回顧展「村山知義の宇宙」を見学することにより、1) 2) とは別系統の3) 表現主義、4) ダダイズム、5) 構成主義へとつながる抽象芸術のあったことを確認認識することができた。結果、1)、2) と3)、4)、5) は、芸術学的には異質のものであるという今日の定説を確認することとなった。しかるに、戦前日本美術会では、必ずしもこれは一般に行き渡っていた認識ではなかった。
2. 大正期から第二次大戦直前の美術界において重要な発表機関である二科展において、上記1. に記した美術的諸傾向は一括りのものとして扱われていたという事実があったのだ。二科九室会の存在である。抽象美術とシュルレアリスム美術の分化・棲み分けが実現していなかったことになる。作品意識において、また鑑賞意識において非具象ということで一括りにされていたわけである。用語的には非具象という語よりも新興美術という語が濶用されていた。しかし、4) と5) の実践者として当時斎藤義重があったことが数種の既刊斎藤義重展図録、ならびにそれに添付された斎藤義重年譜により確認される。戦前における斎藤義重の不遇の理由の一端と捉えることができる。シュルレアリスムならざる新興美術はまだ知られていなかったわけだ。大正期、ならび大戦直前期には、シュルレアリスム美術が抽象、ないし非具象の代名詞となっており、上記4)、5) は、その範疇をはみ出していたということになる。
3. その斎藤義重が、戦後1950年代以降、日本を代表する抽象絵画の巨匠として遇されるに至るのに、どんな状況の変化があったのか。その斎藤が1960年代後半に多摩美術大学の教授として招聘されるのに力となったとされるのが、多摩美術大学の教授職にあった日本シュルレアリスムの代表的画家である福沢一郎なのだが、戦前二人は、芸術学的には異質な作風であった。だが、幾ばくかの交流があったことが確認された。
4. だが、本研究において最もおおきな確認は、村山知義の存在と彼のその後の芸術家・知識人としての変貌、変遷にあるということだった。斎藤義重は、自身の来歴については、寡黙を極めた人だった。韜晦していたとすらいえるほどである。数種の斎藤年譜において、斎藤は、村山知義の表現主義的、構成主義的舞臺装置に対し、共感を込めた言及をしている。しかし、村山に関し、それ以上のことは語られていない。しかし、「村山知義の宇宙」を見学し、そのカタログを精読すると、斎藤と村山の関係は、もっと濃厚であったと推測され、その濃厚さは封印され、韜晦されてきたと推測されるのだ。村山のダダイズムと構成主義は、ひそかに斎藤義重に継承されたといえそうなのだ。一方で、村山自身が、その後、ダダイストというより、演劇人から左翼知識人へ、さらに、第二次大戦直前は、大政翼賛型の知識人へ、そして大戦後は、民主主義芸術を報ずる映画人へ、とイデオロギー上めまぐるしく変貌してゆく。他方で、斎藤義重においては、イデオロギー的行動と発言は生涯にわたって絶無といえる。この落差に謎があるということをも本研究の結論としたい。
5. イデオロギー的変節ともみえるほどの村山知義の変貌ぶり、その変貌の一々が周囲に大きな影響力としてはたらいたのだが、それに比するに、一部にニヒリストとの評もできるほどの斎藤の寡黙、この落差が謎なのである。いずれかが、いずれかを、擁護するため、告発するため両極に対峙したというのでは俗耳に入りやすいが、それでは全くない。それは邪推というものだろう。そうではなく、もっと別のファクターが働いていたと考えたほうが良い。そのファクターを探るのは今後の課題となった。
6. 本研究において、さらにも大きな確認は、斎藤義重ノートが発見である。発見者は、美術家の斎藤史門氏で斎藤義重の次男である。斎藤の逝去後、斎藤義重資料一式は、神奈川県立美術館に寄贈され、分類整理を待っているという。その寄贈資料一式のなかに、斎藤義重の制作ノートともいえる膨大な日記類が見出された。斎藤史門氏は、それをゼロックスコピーし、私千石に閲覧を許された。記述は戦後以降に限られているが、そのノートを見る限り、大戦直前直後の斎藤の生活史は、困窮を極めるものであり、極貧のボヘミアンともいうべきものであったことがわかる。1950年代後半、突如彗星のごとく美術界に登場し、日本を代表する抽象芸術の旗手となったことが、あたかもシンデレラ物語のように映るほどである。

研究成果の概要 (つづき)

7. 村山知義は、戦前 1930 年代に、花王石鹼包装紙のデザインをしている。花王石鹼は、斎藤義重が生活費をうる為に当時勤務していた企業にほかならない。この関係は何か。斎藤義重に、戦前、ドイツ・ダダ、ドイツ表現主義・構成主義の図録多数を閲覧させてくれたドイツ帰りの知識人とはだれか。戦前、その人物の紹介で、東京小石川の名前未詳の喫茶店にて斎藤は作品展示をしたというのが、その紹介者とはだれか、そして名前未詳の喫茶店の名前は何か。ドイツ帰りで、ドイツ新興芸術の資料を膨大に持ち帰っていたのは、当時、山田耕筈か、村山知義、それに永野芳光らを措いてほかにいない。というわけで、その人物は村山知義であり、その喫茶店は、小石川の鈴蘭であろうと推察されるのだ。まだ仮説の域を出ないものではある。
8. 戦前、二科九室会にて斎藤義重と同志的交流のあったシュルレアリスムの画家に高橋迪明がいる。戦中レイテにて戦死している人物である。その夫人高橋園子氏は、存命であり、二人のあいだには、遺児が 5 人残され、5 人とも存命である。この高橋迪明夫人園子氏こそ、斎藤義重の最初の結婚相手であり、上記斎藤史門氏のご母堂である。戦前高橋夫妻は若くして結婚式をあげ、その媒酌人は、熊谷守一である。高橋夫妻の旧居は、北区尾久にあった。斎藤義重の居宅は、同区滝野川にあった。二人は頻りに行き来していた。戦中、高橋迪明は、満州出征から、レイテへ転戦し、レイテ沖にて戦没した。その未亡人園子と斎藤義重は戦後結婚したのである。そして、史門氏を含む二人の子を設けた。そのころの義重・園子夫妻の居宅は、板橋区大谷口であった。そこに異父兄妹 7 人を抱える所帯が出現する。斎藤義重は何度か熊谷守一の千早町の住所を訪問しているとの自証言がある。経済上の相談のための訪問であったと推測される。
9. 熊谷守一郎は、そして、上記板橋区大谷口は、いわゆる池袋モンパルナス地域からはやや外れるが、徒歩圏内である。それにもまして、斎藤義重の健脚は生前つとに有名で、証言によれば 1 時間でも 2 時間でも歩いたという。証言が得られているわけではないが、美術文化協会の代表である上記福沢一郎との行き来があったかもしれない。戦前の美術評論家に筆名佐波甫なる人がいる。戦後は、戦中のイデオロギー的立場への反省から評論家活動を辞し、本名で大学教授として過ごした人物である。佐波は、池袋モンパルナス界隈の絵描きたちのグループ展に跋文を寄せた人物だが、この人物の援助で、戦前、斎藤ならびに上記高橋迪明らが、絶対象派なる抽象絵画のグループを結成している。その第 1 回展の跋文もこの佐波が書いている。この第一回展の後、高橋迪明は出征した。出征後の高橋と園子夫人との間に軍事郵便による文通があり、その記録をこの度、遺児たる第五子花子氏より閲覧を許された。花子氏は、斎藤と園子氏との間に生まれた斎藤史門氏の異父姉当たる方であり、戦後間もない頃の斎藤義重の生活ぶりの思い出を開き書きすることができた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 なし

② 図書

- i) 昭和女子大学図書館編、水声社、小島信夫が読んだ本、上、2013年、全110頁中13—25頁 (小説家中村邦生氏との対談)
- ii) 同、
下、同、 全110頁中14—26頁 (同上)
小島信夫は小説家、実兄小島勇が画家であり、池袋モンパルナス界隈の住民だった。そ実兄のことも話題にした。
- iii) (予定) 千石英世編 水声社、斎藤義重ノート 上下、 2014年、総ページ数未定。

③ シンポジウム

- i) 第7回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館トークショウ:「震災とアートとモンパルナス」、2012年7月28日、立教大学、(美術家高山登氏との対談)
- ii) アーティスト・トーク、抽象ということ、非具象ということ、2012年9月8日、仙台ギャラリー・ターンアラウンド (美術家佐藤達氏、同中川猛氏との鼎談)
- iii) (予定) 第8回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館トークショウ:「(仮題) アートとモンパルナス」、2013年5月18日、立教大学 (美術家高山登氏、同野見山暁治氏との鼎談)